

『源氏物語』の方法 六条御息所の物語上の機能

清水 千香子

一 はじめに

私の名を、どうか聞いてくださいますな。

成仏出来ぬまま、こうして漆黒の闇の中を漂っている私の魂を、どうか嘲笑ってくださいますな。

林真理子氏の小説『六条御息所 源氏がたり』^①はこの哀切に満ちた語りで始まる。作品の連載が始まった二〇〇八年は「源氏物語千年紀」の効果もあつて、『源氏物語』がこれまで以上に世間の注目を集めた年である。林氏の連載も掲載誌の予告によれば「源氏物語千年紀、および、創刊七周年記念企画として」開始されたものだという。いずれにせよ、一〇〇八（寛弘五）年、左衛門の督（藤原公任か）の「あなかしこ、このわたりに、わかむらさきやさぶらふ」ということばを、紫式部が「源氏に似るべき人も見えたまはぬに、かの上（紫の上）は、まいていかでものしたまはむ」と受け流して千年の後、六条御息所という一女性の視点から描かれた新しい『源氏物語』が世に出たことは興味深い。

注釈や解釈の対象となり、学校教育の現場で教材として採択されるテクストは「古典」と呼ばれる。そんな古典の中でも、『源氏物語』ほど現代語訳や創作を通して一般に広く受容される作品もめずらしい。与謝野晶子や谷崎潤一郎の現代語訳が読者のすそ野を広げたことはもちろんのこと、今日では原典を知らなくても読める関連書やマンガ本なども次々

出版され、この国には気軽に『源氏物語』の世界を鑑賞しうる環境がある。前出の『六条御息所 源氏がたり』にしても、連載の場は文芸誌ではなくいわゆる女性誌（小学館発行『和楽』）で、旅行・美食・服飾・芸術などの特集に混じって、毎号一〇ページほどの「物語」が語られる。こうした現象が人々に古典文学との接点をもうけ、架空のいにしえ人に思いをはせる機会を与えることは、教育現場での「古典ばなれ」や「古典ざらい」が加速するなか、日本文学を後世に伝えるひとつのあり方を示すものかもしれない。

それにしても『源氏物語』に登場する多くの女性たちの中で、なぜ六条御息所は時代をやすやすと越えて、現代に甦ることができるのであるうか。三島由紀夫が『近代能楽集』所収の『葵上』で「六条康子」を登場させたように、これまでも後人が六条御息所を甦らせた例はある。能や歌舞伎には六条御息所がスピン・オフした作品もあり、『源氏がたりの』の登場を待つまでもなく、この女性に魅力があることは明らかである。加えて、もともと高貴な女性が年下の男に翻弄される物語は洋の東西を問わず時代を超えて再生産されており、聡明な女性が知性だけではめずらしいものではない。それはどの時代でも現実起こりうることで、読者に不幸な恋愛経験があれば六条御息所は「もうひとりの自分」であり、物の怪と化して自分を棄てた男に不幸の影を落とす様子にささ

やかな慰めを見出すこともあるだろう。こうした点に六条御息所の人気の理由を求め、千年前の読み手にも現代人と同じ思いがあったのだと想像しても、それほど見当違いではないように思われる。『源氏物語』という長編物語の生成に読み手の存在やその時代の「現実」が無関係だったとは考えにくく、座の文芸である和歌が「鑑賞されること」に意味があったように、物語もまた「読まれること」で育っていくものだからである。

しかしながら、「わが身の不幸を嘆く女性たちの代弁者」「不幸な恋愛の犠牲者」というのは六条御息所の表面を語ることに過ぎない。六条御息所の生涯は死後の時間も含めて非常に長く、その苦悩に満ちた道の中には謎と曖昧さが満ちている。そして、御息所が他の女性に打ち勝つて源氏の愛情を独占する場面はないのに、御息所が登場すれば不思議と源氏の人生が大きく揺さぶられ、物語が前に進むということも看過できない現象である。

本稿ではそうした点に注目し、先行研究を手がかりにしながら、あらためて六条御息所の「機能」を考察してみたいと思う。そして六条御息所という女が、源氏の人生ならびに『源氏物語』という作品全体に大きな影響を与える存在であったことを確認した上で、物語を構築するために作者が用いた「仕掛け」を見出したいと思う。

なお、本稿では『新編日本古典文学全集』^②から本文を引用した。

二 夕顔と六条わたり

「夕顔巻」における六条わたりの機能

はじめに、正道寺康子氏がまとめた「年譜『六条御息所』」^③を参考に、六条御息所の生涯を死後も含めて整理しておく。

十六歳	前坊（前東宮）に参内	賢木巻
二十歳	前坊と死別	賢木巻
二十四歳（源氏十七歳）	六条京極に住んでいた頃、源氏が通ってくる。	夕顔巻
二十九歳（源氏二十二歳）	新斎院御禊の日に葵の上一行と車争い	葵巻
三十歳（源氏二十三歳）	生霊となって懐妊中の葵の上を苦しめ、死に追いやる。 斎宮に選ばれた娘（のちの秋好中宮）と伊勢へ下向	賢木巻
三十三歳（源氏二十六歳）	須磨にいる源氏に文をおくる。	須磨巻
三十六歳（源氏二十九歳）	娘とともに帰郷し、六条の旧邸に住む。 発病して出家、娘を源氏に託して逝去	滯標巻
死後（源氏四十七歳）	死霊となって紫の上に取り憑く。 自分の罪を軽くするための供養を源氏に願う。	若菜下巻
死後（源氏四十八歳）	女三の宮受戒の際、死霊として出現	柏木巻
死後（源氏五十歳）	娘の秋好中宮によって追善供養が営まれる。	鈴虫巻

注・「巻」はそのできごとが記述された巻を示す。

源氏がこの世に生を受け、五十数年の時を経て出家を決意するまでの過程は、四十一の巻（「桐壺卷」）～「幻卷」で描かれる。そのうち六条御息所が姿を見せるのは、正道寺氏のファイルによれば「夕顔卷」（「六条わたり」として）から「鈴虫卷」まで、時間にして三十三年間である。これは源氏の青年期から晩年に至るまでの時間と重なる。

六条御息所が「六条御息所」として物語に加わるのは「葵卷」からである。それまでは「六条わたり」として実際の登場がないまま、その存在と人柄だけが語られる。

・御心ざしの所には、木立、前栽などなべての所に似ず、いとどのかに心にくく住みなしたまへり。^④

・六条わたりも、とけがたかりし御気色を、おもむけきこえたまひて後、ひき返しなめならんはいとほしかし。されど、よそなりし御心まどひのやうに、あながちなことはなきも、いかなることにかと見えたり。女は、いとものをあまりなるまで思ししめたる御心ざまにて、齢のほども似げなく、人の漏り聞かむに、いとどかくつらき御夜離れの寝ざめ寝ざめ、思ししをるることいとさまざまなり。^⑤

右は「夕顔卷」からの引用である。これらの記述から、正体が判然としないながらも六条わたりの女が洗練された趣味の持ち主であり、複雑な内面を抱えた女性であること、そして、すでに源氏の愛情を失っていることがわかる。

ところで、「夕顔卷」で描かれたのは謎にみちた「あやし」の世界であった。この巻の女主人公夕顔は中国の伝奇小説『任氏伝』の影響も指摘される人物であり、「らうたげ」で「ものおち」する性格でありながら、自らすすんで源氏に歌を詠みかける大胆さを持つ女である。そこに

廢院という舞台装置や物の怪の存在、さらには三輪山神婚説話の話型も取り込まれて、非日常的ともいえる恋愛がこの巻では展開する。こうした幻想的な雰囲気の中で、六条わたりがはじめて物語に顔を出し、その輪郭が具体的なことばとともに示されるのはなぜだろうか。

先行研究には廢院の物の怪を六条御息所と結びつけない考え方が多くみられる^⑥。本稿でも廢院の物の怪と「葵卷」の物の怪は区別しておきたい。なぜなら、苦悩の果てに登場し、なかなか退場しない「葵卷」の物の怪が源氏だけに目撃される存在であったのに対して、「夕顔卷」の物の怪はふいに姿を現すと、次の瞬間あっさり退場し、源氏以外の人間にも目撃される。この違いを無視して「同じもの」だと判断するのはやはり無理があるからである。廢院の物の怪はただ夕顔の命を奪うために必要な存在であった。ただし、物の怪が現れるのは「六条わたりにもいかに思ひ乱れたまふらん、恨みられんに苦しいことわりなり」という思いが源氏の心よぎり、夕顔を目の前にして「あまり心深く、見る人も苦しい御ありさまをすこし取り捨てばや」とその人柄を否定的にとらえて「思ひくらべられたまひける」すぐ後のことなのである^⑦。つまり読者に六条わたりのイメージを残した状態で物の怪を登場させているわけで、これはまるで混同を期待するかのような運び方である。廢院の物の怪が六条わたりではないとすれば、なぜ作者はこのような展開を用意したのであろうか。

「葵卷」以降の六条御息所をみると、この人物が源氏と一対一の差し向かいでドラマを作るのではなく、そこに他の女との関わりがあつてドラマが生まれていることがわかる。「葵卷」に先立つ「夕顔卷」でもそれは同じで、源氏が六条わたりを思ったすぐ後に、夕顔が物の怪に命を奪われるという流れを注視したい。なぜならこの展開は、のちに「若菜下巻」で源氏が紫の上を相手に過去の女たちを回想し、あれこれ評した後にはひ

き続いて死霊が紫の上を苦しめる展開と重なるからである。源氏がそのとき最も大事に思う女Aの前で別の女Bを思い浮かべ、Bに対する物足りなさを意識する。そしてそれを通して眼前のAに対する思いを深めれば、災いはAにふりかかる。実はその災いが源氏を次の段階に押し出すのである。

廢院で謎の女に耽溺する源氏には本来の居場所があり、そこには自分の果たすべき役目と自覚すべき社会的地位があった。この源氏が身をおくべき世界の象徴的存在が、疎略に扱ふことの許されない高貴な年上の女だったのでないだろうか。六条わたりは源氏の恋に終止符が打たれることを予告し、現実の世界に引き戻す役目を果たしている。そこに本来なら源氏の世界には立ち入ることのできない夕顔との「対比」の意味があるのだと考えられる。

廢院の物の怪は夕顔の命を奪うために必要な存在として機能した。それに対して、六条わたりは源氏が青年時代に別れを告げ、次の一歩へ踏み出すために必要な存在であった——このような読み方は次に取り上げる「葵卷」でも可能ではないだろうか。

三 作者の仕掛け 「葵卷」の六条御息所

「葵卷」以後の六条御息所を考える上で、「物の怪」が重要な要素であることは明らかである。平安時代の文献に記された物の怪については様々な解釈があるが、ここでは医学的見地から物の怪を分析し、その憑依現象を女性特有の問題と絡めてとらえた服部敏良氏の意見に注目してみたい。服部氏は『平安時代醫學の研究』⁸⁾で、平安時代の「ものけ」を、「今日の醫學の説く變質性精神病にはかならない」とし、その考察の過程で、物の怪の背景に当時の女性が抱えた心の悩みがあったこと、そして

四

物の怪の憑依が妊娠・出産と深く関わっていたことを指摘している。⁹⁾『源氏物語』における物の怪現象と当時の記録に残された憑依の実態とは必ずしも一致しない¹⁰⁾。しかし、憑依が妊娠中の女性に起こりやすいという共通の認識があれば、葵の上の思いがけない妊娠は、続く「物の怪の憑依→死」という展開にむけての伏線だと考えられる。さらに、卷名「葵」
「賢木（＝榊）」をみても明らかのように、「葵卷」には神事に関わる事象が多く、そこに物の怪の出現との関連性を見出すこともできる。

西郷信綱氏が『詩の発生』で六条御息所を「当時の概念からすれば異教の世界に棲む罪せられるべき宿世を負った女」と評したように¹¹⁾、神事の世界は異教の世界に他ならず、のちに六条御息所が娘と下っていく伊勢は罪深き所でしかなかった。その感覚は「遷標卷」の一節からもうかがえる。

・心やれるさまにて経たまふほどに、にはかに重くわづらひたまひて、ものいとおしく思されければ、罪深き所に年経つるもいみじう思して、厄になりたまひぬ。¹²⁾

これは重い病を得た六条御息所が齋宮にいたことを不安に感じて出家したといういきさつを語るものである。

通常憑霊現象には加持・祈祷といった仏事による調伏が図られる。しかし神事が執り行われる期間は仏事が一切控えられ、たとえ天皇が病に罹ろうとも平癒のための修法は行われない。つまり、神事の時期は物の怪が跳梁しやすい時期であった。悲劇の発端となる「車争い」も新齋院御禊の日起こっている。妊娠、神事最中の車争い、そして出産。この御息所生靈化・葵の上逝去への道筋から、作者が物語の進行に物の怪現象を含む当時の社会通念を巧みに利用し、結果としてその時代ならではの

の現実感が物語に加味されたと言える。

ところで、池田亀鑑氏の「藤壺とそれから小さな藤壺としての紫の上とを二重うつしにするために、葵上を強いて排除するという不幸な宿命を負わされて登場する」ということは、六条御息所に紫の上の存在を浮上させる役割があつたことを指摘するもので、先行研究の中では共通理解となるものである。確かに六条御息所は源氏の正妻を物語から退場させる。そして、式部卿宮の息女朝顔に「あの人（御息所）のようにはなりたくない」と思わせて源氏を拒む方向に導き、自らも齋宮に卜定された娘と伊勢へ下向する。この一連の流れが紫の上を物語のヒロインに押し上げたことは確実に、六条御息所は自身も含めて紫の上にとってライバルになりうる女性を一掃し、源氏の人生にあらたな局面を開いたのである。このように「葵巻」「賢木巻」までの御息所が紫の上のための「刺客」であつたことは多くの研究者が指摘するところである。ただし、物語の後半で紫の上もまた命を脅かされたことを思えば、御息所の機能が「守護神」として紫の上へ寄り添うことだと考えられない。さらに、「葵巻」の葵の上をみると、六条御息所の影響がその命を無惨に奪うことだけだったのかという疑問が残る。

・（源氏）「あないみじ。心憂きめを見せたまふかな」とて、ものも聞こえたまはず泣きたまへば、例はいとわづらはしう恥づかしげなる御まみを、いとたゆげに見上げてうちまもりきこえたまふに、涙のこぼるるさまを見たまふは、いかがあはれの浅からむ^④。

これは物の怪に悩まされながら出産の苦しみに耐える葵の上を見舞う源氏の姿である。ここには「いかがあはれの浅からむ」と、葵の上に気持ちいが傾く源氏の様子が語られている。そして葵の上が亡くなると、源

氏は次のように嘆く。

・などて、つひにはおのづから見なほしたまひてむとのどかに思ひて、なほざりのすさびにつけても、つらしとおぼえられたてまつりけむ、世を経て疎く恥づかしきものに思ひて過ぎはてたまひぬる、など悔しきこと多く思しつづけられるれど、かひなし^⑤。

自分の気まぐれな浮気でつらい思いをさせた悔やみ、葵の上を「うちとけられない人」と思い続けたことを嘆く源氏のことばは「あないみじ・・・」の場面とも響き合い、最後の最後で心が通い合った夫婦の悲しい別れと残された者の無念をしみじみと描き出す。しかしその一方で、作者は「かひなし」としめくくつて余韻を奪ってしまうのである。

斎藤正昭氏は『源氏物語 展開の方法』^⑥で、「葵巻」までの源氏の成長を四段階に分け、それぞれの段階で葵の上が藤壺・空蟬・若紫と比較され、源氏に別の女性との恋に向かわせる要因となっていることを指摘している。この損な役回りを担った葵の上は、死の代償としてようやく源氏の愛情と関心を得られたのは源氏との関係に六条御息所との対立が加わった結果であつた。そして、葵の上の死を通して、源氏には己を顧みる機会が与えられる。他にも「何かを犠牲にして別の何かを代償として得る」という仕組みが六条御息所の周辺にはある。六条御息所を間接的な要因にして源氏の求愛を拒み続けた朝顔は、その態度が逆に源氏の思いを掻き立て、その後も長きにわたって特別な存在であり続ける。御息所の不幸を土台に幸運を得たのは娘の秋好中宮で、源氏の尽力で冷泉帝に入内した後の栄耀は、母の人生では実現されなかつたものである。先にも述べたように、六条御息所が源氏の愛情を独占し、物語のどこかで幸福なヒロインとして輝く瞬間は見当たらない。しかし、六条御息所が

動けばその周囲の女性たちの人生もなんらかの影響を受け、その変遷を通して源氏の人生に次の局面が準備されるという流れがあるように思われる。

四 「若菜下巻」における六条御息所の役割

再び先行研究をみると、六条御息所の「したこと」およびその意味については、「物語の表面には夕顔や葵上や紫上がいて、その裏面或いは側面から物語世界に入りこんで、その存在を脅かす、というのが御息所に与えられた役割である。」^①という意見が共通の見解だと考えられる。ただし、六条御息所という人物をどうとらえるかについては、池田氏の「葵の上を死にいたらしめること、その齋宮の将来を源氏に託すこと、齋宮が中宮となつて、紫の上と接近するという宿世の中の存在として生きる以外には、何の長篇的意味もない存在である。」^②という否定的な見方もあり、評価が一致しているわけではない。

確かに、一度はヒロインに浮上させた紫の上も別の機会では命を脅かされるのなら、六条御息所は必要なきに駆り出され、そのときどきの要請に応じた姿に身を変えて一仕事する「刺客」とみても不自然はない。しかし、「六条御息所が源氏物語の中にしめる役割は、光源氏の女性遍歴における罪障意識を主題とする点にあると思われる。」^③や「この物の怪の存在は、源氏の人生を相対的にとらえ直してみせる物語の目でもある。」^④という見解があるように、六条御息所を作品の主題と結びつけてとらえることは少なくない。そこで六条御息所が死霊として登場する「若菜下巻」「柏木」に注目し、その時期から過去に遡って源氏と御息所の人生を見直してみたいと思う。まず、この二巻から六条御息所に関係した部分をまとめておく。

朱雀院五十の賀に先立ち、六条院で女樂が行われた。それが終わった後、源氏は紫の上を相手に①過去の女性関係を回想して論評する。翌日、紫の上は発病。源氏は回復の兆しがない紫の上を二条院へ移し、自身も看病のため六条院を離れがちになる。紫の上が危篤状態に陥ったとき、②加持に調伏されて六条息所の死霊が出現するが、紫の上は五戒を受けて蘇生する。(注・このとき、紫の上は三七歳で女の厄年を迎えていた。)

二条院で紫の上の命が脅かされていた頃、以前から女三の宮を思っていた柏木は六条院が人少な状態だったのに乗じ、小侍従の手引で女三の宮と通じる。(注・その日は葵祭御禊の日の前日であった。)のちに源氏は女三の宮の懐妊と「事の真相」を知る。女三の宮は男児出産後に出家し、その受戒の際、③六条御息所の死霊が現れる。柏木は重い病を得て世を去る。

①の場面(「若菜下巻」)で、源氏は六条御息所について次のように語る。

・中宮の御母御息所なむ、さまことに心深くなまめかしき例にはまづ思ひ出でらるれど、人見えにくく、苦しかりしさまになむありし。恨むべきふしぞ、げにことわりとおほゆるふしを、やがて長く思ひつめて深く怨ぜられしこそ、いと苦しかりしか。心ゆるびなく恥づかしくて、我も人もうちたゆみ、朝夕の睦びをかさはさむには、いとつつましきところのありしかば、うちとけては見おとさるることやなど、あまりつくるひしほどに、やがて隔たりし仲ぞかし。いとあるまじき名を立ちて、身のあはあはしくなりぬる嘆きを、いみじく思ひしめたまへりがいとほしく、げに、人柄を思ひしも、我罪ある心地してやみにし慰めに、中宮を、かく、さるべき御契りとはいいな

がら、とりたてて、世の譏り、人の恨みをも知らず心寄せたてまつるを、かの世ながらも見なほされぬらん。なほざりなる心のすさびに、いとほしく悔しきことも多くなむ^②。

この部分を要約すると次のようになる。

御息所は並々ならぬ特別な人、奥ゆかしくて優雅であった。しかし、付き合いくく、逢うのが苦痛であった。気詰まりで心が休まることはなく、油断すれば見下されそうな気がした。ふたりの関係が立ち消えになったのは私（源氏）の罪のように思われたけれども、その償いのために娘の秋好中宮に精一杯のお力添えをしている。今ではきつとあの世から私のことを見直してくれているだろう。

ここで思い出されるのは、「夕顔巻」で源氏が六条わたりに思いをさせた場面である。物の怪が出る少し前の源氏の胸の内をもう一度引用しておく。

・六条わたりにもいかに思ひ乱れたまふらん、恨みられんに苦しうことわりなりと、いとほしき筋はまづ思ひきこえたまふ。何心もなきさし向かひをあはれと思すまに、あまり心深く、見る人も苦しき御ありさまをすこし取り捨てばやと、思ひくらべられたまひける^②。

「中宮の御母御息所なむ・・・」は紫の上に直接語ったことばであり、「六条わたりにも・・・」は夕顔（何心のなきさし向かひ）と表現される）を見ながら心に浮かんだことばである。夕顔巻での源氏は十七歳、若菜下巻で女楽を催した頃の源氏は四十七歳。この間の三十年という月日を経ても、源氏の六条御息所に対する気持ちにはさしたる変化がないこと

がわかる。すなわち、六条御息所の苦悩の原因を作っているのは自分だという自覚はあり、それに対してすまないとも思っている。しかし御息所の人柄を理由に、自分だけが悪いのではないという自己弁護も行わずにはいられない、それが源氏の本音なのである。「若菜下巻」では秋好中宮への厚遇ですべてに決着がついたかのような物言いすらみられる。しかし、源氏のこの発言を契機に、六条御息所は死霊となつて紫の上に取り憑くのである。

「若菜下巻」では調伏された死霊が源氏に一对一の対話を懇願する場面②が描かれるが、そのときの発言の一部を引用する。

「(1) 中宮の御事にても、いとうれしくかたじけなしとなむ、天翔りても見たてまつれど、道異になりぬれば、子の上までも深くおぼえぬにやあらん、(2) なほみづからつらしと思ひきこえし心の執なむとまるものなりける。その中にも、生きての世に、人よりおとし思し棄てしよりも、(3) 思ふどちの御物語のついでに、心よからず憎かりしありさまをのたまひ出でたりしなむ、いと恨めしく。今はただ亡きに思しゆるして、他人の言ひおとしめむをだに省き隠したまへとこそ思へ、とうち思ひしばかりに、かくいみじき身のけはひなれば、かくところせきなり。(4) この人を、深く憎しと思ひきこゆることはなけれど、まもり強く、いと御あたり遠き心地してえ近づき参らず、御声をだにほのかになむ聞きはべる。(5) よし、今は、この罪軽むばかりのわざをせさせたまへ。修法、読経とののしることも、身には苦しくわびしき炎とのみまつはれて、さらに尊きことも聞こえねば、いと悲しくなむ。中宮にも、このよしを伝へきこえたまへ。ゆめ御宮仕のほどに、人ときしろひそねむ心つかひたまふな。(6) 齋宮におはしましころほひの御罪軽むべからむ功德のことを、かならずせさせたまへ。いと悔しきことになむありける。」^②

六条御息所が訴えたことは、次のようなことである。

- (1) 娘の秋好中宮に対する配慮はありがたいが、死んだ私には子どもを深くは感じられない。
- (2) 源氏に対する執着心(心の執)が残る。
- (3) 思い合っている仲(思ふどち)ならではの話の中で、ついでのように自分の悪口を言われたことがうらめしい。
- (4) 紫の上を憎く思っているわけではない。仏神のご加護が強くて源氏には取り憑けなかったのだ。
- (5) こうなった今は私の罪を軽くするために供養してほしい。
- (6) 齋宮時代の罪が軽くなるような功德をせよと、娘に伝えてほしい。

死霊のことばには源氏に対する強い執着が率直にあらわれている。その執着が成仏を妨げ、源氏の「思ふどち」ということばに反応して紫の上への憑依が起こったのである。この執着の前では、源氏の「中宮をとりたてて」という考えなど何の意味もなく、六条御息所には「子の上までも深くおぼえぬにやあらん」と返されてしまう。

御息所が齋宮となった娘にとともに伊勢へ下向したことはすでに述べた。この決断から今後の人生を「母」として生きる覚悟を読み取ることもできるが、実際はどうであっただろうか。「葵卷」で、六条御息所の心情は次のように語られる。

・幼き御ありさまのうしろめたさにことつけて下りやしなまし、とかねてより思しけり。²⁴⁾

ここでの「ことつけて」は、伊勢下向の真の目的と御息所の本音を暴

露する。娘に対する愛情に嘘はないにせよ、葵の上亡き後も自分を迎へ入れようとしない源氏の「あさましき御もてなし」に接し、そしてそれを怪訝に思う世間を目の当たりにすれば、誇り高き六条御息所が取るべき道は他になかったのである。しかし命の絶えた今となっては、貴婦人でありつづける意味も、「母」であり続ける必要もない。死霊が生前には自心や自尊で封印してきた思いを無遠慮なまでにさらけ出せたのは、「死んだ」という事実が強い立場を与えたからであろう。生きていれば、たとえその身が俗世にあるうと仏門にあるうと、源氏への「心の執」は自制し、封印し続けなければならぬ。「葵卷」の物の怪出現はその自制がきかなくなった結果として起こったことであり、そこに御息所の意志は存在しない。しかし、「若菜下巻」での出現は明らかに御息所の意志が働いた結果である。

もともと六条御息所の娘の入内は源氏の誠意の結果と呼べるものではなかった。後見役を任された源氏はこの美しい娘に大いなる関心を示しており、御息所の「男女の關係抜きで」という遺言が足枷とならなければ、また天皇の代替わりという事態がなければ、彼女も源氏の「色好み」の対象となっていたかもしれない。その意味で、秋好中宮という女性是不幸な母に生きる道を残し、母亡き後は「源氏のものにならない」という運命をたどりながら、立后することで源氏の栄華を支えるなど、多様な役割を担った登場人物だと言えるだろう。さらに、御息所が人間としての死を迎えた「漂標卷」から、死霊として復活する「若菜下巻」までの期間は、御息所の忘れ形見という形で母の存在を物語に残す役割も担っていた。

「若菜下巻」で出現した死霊は、女三の宮出家の折に一層すさまじい様子を見せる。次に「柏木卷」から調伏された物の怪が源氏に語ったこと

ばを引用する。

・「かうぞあるよ。いとかしこう取り返しつと、一人をば思したりしが、いとねたかりしかば、このわたりさりげなくてなむ日ごろさぶらひつる。今は帰りなむ」とてうち笑ふ⁵⁵。

「かうぞあるよ」は「こうでなくては」あるいは「そら、ごらん」といったところであろうか。ここで死霊は「日ごろさぶらひつる」と、女三の宮に取り憑いて出家を後押ししていたと告げている。確かに、柏木との密通が葵祭御禊前日だったという事実、そしてその後妊娠・出産が続いたことを考え合わせると、「葵巻」と同じく、この時期に物の怪が暗躍していたという解釈はごく自然で、『新編古典文学全集』の頭注が説明するように、「(憑依は)女三の宮出家の経緯の種明かしでもある」という見方も納得できる。しかし、ここでの死霊の登場はあまりにも唐突で、物語の流れを不用意に断ち切るものだという印象は拭えない。そのせいか、「若菜下巻」「柏木」における死霊・六条御息所の登場については、「紫上の病は死霊の出現の時まで独自の重要な意味を担って描かれていた。物怪の力を借りるまでもなく、紫上が発病して何の不思議もないような物語の局面が細密に辿られていたということである⁵⁷。」という見解もあるように、紫の上の病も含めて、女三の宮が出家に至るまでの道筋は六条御息所の死霊に関係なく十分に語られているという意見は多い。もちろん、筋書きには必要のない登場かもしれない。しかし、ここでの死霊は「うち笑ふ」のである。それは恨み言を切々と並べ、娘の今後や自分への供養を頼み込んだときは違う振舞いであり、秋好中宮を入内させたことで過去を清算したと踏んでいた源氏の心に、さらなる一撃が加えられたとも読めるだろう。そして、それはかつて葵の上と死別した後

悔する源氏を、作者が「かひなし」と言い切った時のように、情け容赦ない仕打ちではないか。

「六条御息所はなぜ死霊となつて現れたか」という謎についてはすでに多くの指摘がある。代表的なのは源氏の絶対性の限界を露呈するためという内容のもので、これは源氏が築きあげた華やかで充実した世界に綻びをもたらす存在として死霊が登場するという見解である。また、過去との関係からこの問題を論じ、源氏に与えた「女三の宮の出家」という打撃が、過去からの宿縁に溯って問い直されているという指摘も多い。いずれにしても、「若菜下巻」での死霊登場は四十七歳になつた源氏に過去を振り返らせ、晩年をどう生きるかという問題を正面から突きつけたのだと考えてよいのではないだろうか。

五 結語

六条御息所の生涯について考えることは、源氏の生涯そのものを考えることにつながる。御息所は夕顔・葵の上・朝顔・紫の上など『源氏物語』の主要なヒロインたちの運命を左右するだけではなく、源氏自身の生き方にも影響を与え、ときにはその人生を左右する役目も担うからである。思えば、六条御息所の源氏に対する思いはほとんど報われることがない。それどころか物語に姿をみせた段階で源氏の愛情はすでになく、義務感や世間体への慮りだけでかろうじてつながっているという痛ましい関係であった。それにもかかわらず、六条御息所は源氏の人生に接点を持ち続け、人間・生霊・死霊と姿を変えながら、もっぱら源氏の人生の重要な局面に姿をみせて揺さぶりをかける。そして、その御息所の視線の先で源氏は栄華をきわめ、過去のあやまちの因果に苦悩し続ける。とりわけ死霊は過去と現在を結びつける媒介として機能したものと考える

られる。人生もそろそろ終盤という時期に、死霊は過去を振り返る源氏の前に現れ、「すべてが終わったわけではない」と思い知らせる。そして、思い知らされる側の源氏は未熟だった過去の自分と対峙せざるを得なくなる。源氏が須磨から帰京して以来十八年もの間、物語の奥に隠しておいた六条御息所を登場させる必要があったのも、六条御息所こそ青年期から晩年に至るまでの源氏を知り尽くした存在であり、生前には物の怪になったこともあるという経緯があることで、死霊としての再登場にも違和感が生じなかったからであろう。

源氏の人生と六条御息所の存在 —— 愛情は紫の上に、正妻としての地位は葵の上や女三の宮に奪われ、「気づまりな女」という冷たいことを投げつけられた女が、実は源氏の人生にひそかに寄り添いながら、その人生を陰で揺さぶっていたという解釈が成り立つならば、こうした皮肉に物語の奥行きを感じないわけにはいかない。そして、「愛しすぎる苦悩」を知る登場人物に、愛情を存分に受けた女たちよりも輝ける場があるとするば、それは読者の心の中に他ならず、そのことが時代を越えて「六条御息所物語」の再生を促し続けてきたのだと言える。

注

- ① 林真理子『六条御息所 源氏がたり』（二、光の章）二〇一〇年 小学館
- ② 『新編日本古典文学全集20源氏物語①』一九九四年、『新編日本古典文学全集21源氏物語②』一九九五年、『新編日本古典文学全集23源氏物語④』一九九六年、いずれも校注・訳 阿部秋生 秋山虔 今井源衛 鈴木日出男、小学館
- ③ この「年譜」は『人物で読む源氏物語 六条御息所』（二〇〇五年 勉誠出版）所収の「人物ファイル―六条御息所」の一部である。一五二―三頁

- ④ 『新編日本古典文学全集20源氏物語①』「夕顔」一四二頁三―五行目
- ⑤ 同右 一四七頁一―七行目
- ⑥ たとえば、黒須重彦氏は『源氏物語私論―夕顔の巻を中心として―』（一九九〇年 笠間書院）の第九章「夕顔をとり殺した物の怪について」で「そもそも、六条御息所は夕顔を知らないものであり、夕顔を呪詛する必然性を持たない。」と述べている。（二六一―頁六行目）また、藤本勝義氏は『源氏物語の人ことば文化』（一九九九年 新典社）の第一章「夕顔造型 ―その性情と死―」で「夕顔物語は、三輪山伝説・古代神婚説話・葛城神話・妖狐の投影そして河原院怨霊説話などを下敷きにした伝奇的、幻想的色彩さえ感じられる展開で成り立っていた。この中に、現実の六条わたりの女の生霊を持ち込む必要はない。」と述べている。
- ⑦ このくだりは『新編日本古典文学全集21源氏物語①』「夕顔」の一六三頁一―一五行目にある。
- ⑧ 服部敏良『平安時代醫學の研究』（復刻版）一九八〇年 科学書院（初版は一九五五年 桑名文星堂から出版されている）
- ⑨ ⑧の「第二章 文学及び其の他の文献に現れた疾病の解説」において、服部氏は次のように述べている。「平安時代に於ける『もののけ』の出現に更に大きな原動力となったものに当時の女性があつた。（中略）女の不安と焦燥、種々の感情の交錯、誰れに語ることもできず身一つに秘めた苦しみ、憂愁の鬱積は、やがて精神に変調を来し、僅かの肉体的、精神的変動によつても病的症状を発現して、幻視・幻聴などの錯覚を生じ、之が怨霊となり「もののけ」となつて現れるのである。平安時代の「もののけ」が女性に多く現われ、しかも、妊娠・出産・病氣等の如き肉体的変化に伴つて出現することが多いのも、よく此の間の事情を明らかにしているのである。」（七〇頁四行目―一三行目）なおこの引用箇所については漢字を一部新字体に改めた。
- ⑩ 藤本勝義氏は『源氏物語の〈物の怪〉 文学と記録の狭間』（一九九四年 笠間書院）の序（vii頁）で『源氏物語』や『榮花物語』には、多くの物の怪が語られている。しかしこれらの大半は、憑依現象とかけ離れているといつてよい。虚構化された物の怪の物語なのである。」と述べている。
- ⑪ 西郷信綱『詩の発生』「源氏物語の『もののけ』について 二 游離魂」

- 一九六〇年 未来社 三〇三頁一～二行目
- ⑫ 『新編日本古典文学全集21源氏物語②』「落標」三〇九頁一四行目～三一〇頁三行目
- ⑬ 池田亀鑑『物語文学Ⅰ』「長篇的各説話の諸相とその成立」24 六条御息所物語」一九六八年 至文堂 一五四頁一八行目～一五五頁二行目
- ⑭ 『新編日本古典文学全集21源氏物語②』「葵」三九頁四行目
- ⑮ 同右 四八頁一～二行目
- ⑯ 斎藤正昭『源氏物語 展開の方法』第三章 人物造型をめぐる 第二節 葵の上」一九九五年 笠間書院
- ⑰ 佐貫新造『源氏物語の状況的人間像』「六条御息所 暗黒界の象徴 一 夕顔巻の六条御息所」一九九七年 翰林書房 一二二頁三～七行目
- ⑱ ⑪に同じ 一六〇頁八～一一行目
- ⑲ 森一郎『源氏物語作中人物論』「六条御息所の造型―その役割と問題― 一 死霊」一九七九年 笠間書院 七六頁五～六行目
- ⑳ 鈴木日出男『源氏物語虚構論』「紫の上の罹病 光源氏の道心と愛執 三」二〇〇三年 東京大学出版会 九二三頁一～一二行目
- ㉑ 『新編日本古典文学全集23 源氏物語④』「若菜下」二〇九頁七行目～二一〇頁六行目
- ㉒ ⑦に同じ
- ㉓ 『新編日本古典文学全集23源氏物語④』「若菜下」二二六頁九行目～二二七頁一二行目
- ㉔ 『新編日本古典文学全集21源氏物語②』「葵」二二三頁三～四行目
- ㉕ 『新編日本古典文学全集23源氏物語④』「柏木」三一〇頁二～五行目
- ㉖ 『新編日本古典文学全集23源氏物語④』「柏木」三一二頁頭注二～一〇行目
- ㉗ 大朝雄二『源氏物語正篇の研究』第十七章 六条御息所の死霊」

一九七五年 桜楓社 五四二頁三～五行目

参考文献

- 池田亀鑑『物語文学Ⅰ』一九六八年 至文堂
- 大朝雄二『源氏物語正篇の研究』一九七五年 桜楓社
- 黒須重彦氏『源氏物語私論―夕顔の巻を中心として―』一九九〇年 笠間書院
- 西郷信綱『詩の発生』一九六〇年 未来社
- 斎藤正昭『源氏物語 展開の方法』一九九五年 笠間書院
- 佐貫新造『源氏物語の状況的人間像』一九九七年 翰林書房
- 鈴木日出男『源氏物語虚構論』二〇〇三年 東京大学出版会
- 西沢正史・企画監修 上原作和・編集『人物で読む源氏物語 六条御息所』二〇〇五年 勉誠出版
- 服部敏良『平安時代醫學の研究』（復刻版）一九八〇年 科学書院
- 林真理子『六条御息所 源氏がたり』（二、光の章）二〇一〇年 小学館
- 藤本勝義『源氏物語の〈物の怪〉文学と記録の狭間』一九九四年 笠間書院
- 藤本勝義『源氏物語の人ことば文化』一九九九年 新典社
- 森一郎『源氏物語作中人物論』一九七九年 笠間書院
- 本文
- 『新編日本古典文学全集20源氏物語①』一九九四年
- 『新編日本古典文学全集21源氏物語②』一九九五年
- 『新編日本古典文学全集23源氏物語④』一九九六年
- いずれも校注・訳 阿部秋生 秋山虔 今井源衛 鈴木日出男、小学館
- （本学大学院博士後期課程）